

Title	近代における会話文特立符号種の消長
Author(s)	鳩野, 恵介; 古田, 雄佑; 岩城, 佐和 他
Citation	語文. 2008, 91, p. 69-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69120
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近代における会話文特立符号種の消長

岩鳩 城野 佐恵 和介

川那邉惟奈古田 雄佑

はじめに

話及び文範』で夙に言及されている(原文旧字旧かな)。 げた。現在では、発話には「 」を用い、また本文に対する註釈 などには () を用いる、という緩やかな規範が存するが、この ような規則については、明治四十五年(一九一二)刊の『作文講 の文から区別するための符号種は、近代に至って大きな発達を遂 日本語の表記体系における会話文特立符号種、即ち会話文を地

ほぼ同様である。

(芳賀矢一 杉谷代水編『作文講話及び文範』一四五―四六

頁

錯誤を経なければならなかった。殊に明治前中期は、次の引用で の試みがなされていた。 も言及されているように、 か かる諒解事項が成立するためには、ある程度のスパンと試行 種々の会話特立符号種が存立し、様々

明治二〇年前後には山田美妙、巌谷小波などの小説で、会話

や心内語などの引用語句を=で挟んで示す形もみられた。

(略)他に(())を使った会話文も、この時代の山田美妙

場合に用いる。(略) また () は註解のようなところに用 通例「 れている。 いる。これは洋文のまねであるが必要な場合があるので行わ い、あるいは時として人物の詞の中にまた他人の詞を入れる 』()――などの符号も句読に準じたものである。 」は文章中人物の詞に用い、『 』は書名などに用 ――も西洋のダッシュの輸入で、用法は()と

を使ったり、発話者の名を示したりする形がしばらく行われ、 形式の過渡期であり、以後も「 」でなく ()や (()) や尾崎紅葉にみられる。(略) 明治二〇年代前半は会話文の 69

定着するに至った。として次第に広まり、明治三〇年代には一般的な形式としてし、明治二〇年代後半になると「……」の形が小説の会話文を地の文に織り込んで示す古典的な形も長くみられた。しかを地の文に織り込んで示す古典的な形も長くみられた。しかまた、幸田露伴や樋口一葉のように、引用符を使わず会話文また、幸田露伴や樋口一葉のように、引用符を使わず会話文

辞典。』所収、一一三―一四頁)(「近代小説にみる会話文の変遷」『句読点、記号・符号活用

しかるに文学作品の表記を考える際には、手稿や初出誌に朔る拠ることとし、引用文の字体もできるだけ本文に従った。過程の一斑を明らかにしたい。文献はなるべく単行本(初版)にを定めて、会話特立符号が「 」ないし『 』に収斂されてゆく本稿では、この記述を検証するため、特に明治期の文人に照準

しかるに文学作品の表記を考える際には、手稿や初出誌に溯るのまま作者の意図の反映と見てよいものかどうか、疑義は残るののまま作者の段階でも、句読点レヴェルで「出版社が主導し」おり、単行本の段階でも、句読点レヴェルで「出版社が主導し」おり、単行本の段階でも、句読点レヴェルで「出版社が主導し」が述べるとが要求された作品も見られるので、果して単行本の表記をそえる際には、手稿や初出誌に溯るである。

えられ、その点において、出版社や編者の介入は極めて軽微なも作家と較べてみると、特定の会話特立符号を意図的に用いたと考ように、明治二十年代を中心として活躍した作家は、それ以降のそれでもなお、後に引く紅葉の証言(二―二参照)からも分る

たのはそのためである。のであったと思われる。本稿で硯友社同人を調査対象の中心とし

一、会話文特立符号の種類

二―一、発話者を表示するもの

した形式とおぼしい。このことに就いては、江湖山(一九六四)ることがしばしばある。これは、戯作や滑稽本の表記方法を踏襲明治初期の文学作品では、作中の会話部に発話者を逐一表示す

も言及している。

(江湖山一九六四、一三九頁。傍線引用者、以下同) は魯文の作品はもちろん、坪内逍遙の「一読三歎当世書生気は魯文の作品はもちろん、坪内逍遙の「一読三歎当世書生気なども踏襲している。 なども踏襲している。

まとめておくと、次の如くである。にも同様のものがみられる。宇野氏が引用した作品の特徴を私にても同様のものがみられる。宇野氏が引用した作品の特徴を私にされらの他に、たとえば宇野(一九六四)に挙げられた諸作品

表示も逐一有り。 1. 尾崎紅葉『風流京人形』…会話文に(^))を使用、発話者

- 2. 巖谷小波『五月鯉』:会話文に「 のみ使用、閉じ括弧は使
- 用せず。なお、会話の一部は==で区別している。
- 3 4. 山田美妙『情詩人』…会話文に「 」を使用、会話前には新 延春亭主人『散浮花』…会話文に括弧は使用せず、(留)や 行一字下げが行われている(連載第四回から形式が統一)。

二つのものが区別されるのである。一つは行頭をあけるもので、 他の一つは補助符号を使うものである」(三十九頁)と結論して いるが、ここで稿者が補足しておくと、「補助符号を使うもの」 宇野氏は、「いわゆる会話文の示し方には(略)大きく分けて (女)などのように、発話者を符号的に表示する。

と、B.発話者表示のみのもの(4)とに区分することができる。 表示するものはさらに、A.他の符号と併用して示すもの(1) まひとつは発話者を表示しないもの(2と3)であり、発話者を には二種あって、ひとつは発話者を表示するもの(1と4)、い

ここで、発話者を表示する例を以下に八例挙げておく。

○川島忠之助譯『嶽八十日間世界一周』(明治十一年刊) ○假名垣魯文『雑談安愚樂鍋』(明治四年刊)

〇三遊亭圓朝 若林玵藏『微牡丹燈篭』(明治十七年刊) ※領「龍動ヨリ來リ玉フカ フヲツグ「然リ

前より戰慄へて居りました藤助は ※侍「コレ藤助其天水桶の水を此刀に注けろと命けれバ最 藤「ヘイとんでもない

事になりました(略)

○末廣鐵腸『呱滟雪中梅』(明治十九年刊)

※老母「マア藥は止ませう

○江見水蔭『田毎源氏』(明治三十年刊 ※泥「合点だ。呑込んだ。 金「合圖の船歌。

※(吉)まいつた~いふべからず~

○坪内逍遙『訓讃當世書生氣質』(明治十八年刊)

〇山田美妙『夏木立』(明治二十一年)の一部

※(珊瑚)この私を摑まへて「貴樣は贋物」だと言ひまし

〇二葉亭四迷『鱊浮雲』(明治二十—二十四年刊)

*

(昇)ヲヤ此樣(こん)な惡戲をしたネ

前半五例はA. 他の符号と併用して示すもの、後半三例はB.

のカギを用いて会話文を表示する。しかし四迷の『浮雲』には、 発話者表示のみのものである。Aに属するものは、閉じ括弧なし

閉じ括弧なしの「 で会話を区別する例と、「 」によって会話

に偏って見られるようである。あるいは、会話を特立するための を区別する例とが見られ、前者は特に前半部、後者は特に後半部 一般的な用法が未だ定まっていなかったために、同一作品内にそ

のような揺れが見られるのかもしれない。

この事実は、開きのカギが「庵点」の変化したものであるという いる場合、閉じのカギは必ずしも用いられた訣ではないと言える。 以上から、会話部分に発話者名を表示して、なおかつ符号を用

「スポイト」「キリステル」等のように、外来语を特立させる守号、大熊氏は、『和蘭医事問答』(安永二年=一七七三刊)における大熊(一九九五)の説を支持するものであろう。

「鈎画」に関しては、太宰春臺『和讀要領』に次の如くある。の部分は鈎画から変化したものだと考えられる」と結論した。「鈎括弧(乙)」の成立について、「開きの部分は庵点から、閉じっ、「鈎括弧」を「鈎括弧(甲)」と名づけ、一方の「会話文の部分をを便宜的に「鈎括弧(甲)」と名づけ、一方の「会話文の部分を「スポイト」「キリステル」等のように、外来語を特立させる符号「スポイト」「キリステル」等のように、外来語を特立させる符号

末ニハ」ヲ用テ。前後ヲ隔―斷ス。皆是ヲ鉤―畫トイフ―段落ヲ分ルニハ。鉤―畫ヲ用フ。章―首ニハ「ヲ用ヒ。結○太宰春臺『和讀要領』(享保十三年=一七二八)

の第一号(明治二十一年五月)に、紅葉山人の「風流京人形」が述べている。また宇野(一九八二)は、「例えば、『我楽多文庫』にであろう。啓発はプレッシャーだったと言ってもいい。」や一たであろう。啓発はプレッシャーだったと言ってもいい。」や一たであろう。啓発はプレッシャーだったと言ってもいい。」や一たであろう。啓発はプレッシャーだったと言ってもいい。」や一にであろう。啓発はプレッシャーだったと言ってもいい。」や一にであろう。たとえば亀井(一九九三)も、稻垣千穎関わるものであろう。たとえば亀井(一九九三)も、稻垣千穎

掲載されているが、再版本では一行の字詰めが異なっているため 掲載されているが、再版本では一行の字詰めが異なっているため 掲載されているが、再版本では一行の字詰めが異なっているため をのと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あのと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あのと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あのと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの をのと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くくりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主意を喚起するが、この両 あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のある ものと、一くりにして他と区別することに主眼のある ものと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他と区別することに主眼のあるものとの あっと、一くりにして他との。 あるものとの。 「で、」」ということに主眼のあるものとの のと、一くりにして他との。」ということに主眼のあるものとの のと。

なお発話者を表示する次のような例が見られる。 因みに、会話特立符号種として「 」が大体定着した後にも、

位「試補々々!」≪甘「遉は交際官試補!」

荒「馬鹿な!」風「試補々々!立つて泣きに行く……………。」

但し『金色夜叉』には、発話者を逐一表示せずに、「」のみで会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物がで会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物がで会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物がの会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物がの会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物がの会話を特立した部分もあるので、記名性を有した複数の人物がの会話を持立した。

二一二、符号のみで会話を特立させるもの

に『 』を用いた例は見られない)。映しうることなどが語られており、興味深い(実際に紅葉が作中複数の会話特立符号が用いられたことや、それが個人の嗜好を反葉「故紅葉大人談片」でも述べられているが、明治二十年代には同様のことは、明治三十七年『新小説』第九年第一巻の山岸荷

以下、同時代の用例を符号種別に幾つか見ておく。

① 『 』を使用したもの

○大江(巖谷)小波『當世少年氣質』(明治二十五年刊)の

鎭雄大が相手にせぬだけ、(略) ※鎭雄は心中冷笑つて、『なんの……燕雀めら。』―――但し

次の如く述べている。

さて尾崎紅葉は、「文盲手引草」(明治二十二年発表)において、

②(())を使用したもの

○尾崎紅葉『片長色懺悔』(明治二十二年刊)

※((左樣か)) と聲をうるませ ((玉傷は………))

○巖谷小波『當世少年氣質』(明治二十五年刊)

※((若様! モシ若様! 御車が参つて居ります!))

と、云ひながら乘せ樣とすると。

○江見水蔭『鎌わぬ坊』(明治二十九年刊)

縫の尼御前に一本參られける。※((何時の間に其樣な。灸の痕さへなかつた躰に))とお

③==を使用したもの

日付『讀賣新聞』)〇石橋思案「言文一致に附いて」(明治二十二年三月三十一

ハ上方の者にハ丸で譯が分からない、だから言文一致は※言文一致を攻擊するお方ハ=江戸ッ子の書いた言文一致

〇石橋思案『京がのこ』(明治二十三年刊)

至ッて區域が狭い=とおッしゃいますが

(略)

※=それは/\=と私を慰めてくれました。

○浩然堂主人「甕外生の『明治文章の月旦』を讀む」(明治

二十三年二月三日『日本之文華』)の一部

※甕外生曰く=議論文中、輕妙なるもの、實に氏(田口卯

吉氏)を以て第一とす=と、(略)

更に調査範囲を拡げて、

作家ごとにどのような符号を用いてい

いた記述は多少の修正を必要とするが、大体は的を射ていると考を簡単に纏めたのが、末尾に掲げた附表である。調査対象は、硯を簡単に纏めたのが、末尾に掲げた附表である。調査対象は、硯を簡単に纏めたのが、末尾に掲げた附表である。調査対象は、硯を簡単に纏めたのが、末尾に掲げた附表である。調査対象は、硯をの上纏めたのが、末尾に掲げた附表である。調査対象は、硯をの上纏のたのが、末尾に掲げた所表である。調査対象は、硯をの一点である。の作品である。当該作品中に用いられた会話特立符をがでした。

これを以て、本調査報告を終ることにしたい。(了)

えられる。

注

- 用いられている(金属活字ではこの差異が捨象される)。る庵点と、「」(鈎括弧甲)とが、明らかに形の上で区別されて(1) 假名垣魯文『維護安愚樂鍋』(木版印刷)では、会話を特立させ
- 落の末尾毎に」を用いているが、章首に「は用いない。(2) 実例を挙げると、森鷗外『即興詩人』(明冶三十五年刊)は段
- 話し手による会話が連続する場合は、大体、各会話文の初めに閉(3) 例えば山田美妙『漁隊の遠征』(明治三十六年刊)は、複数の

引用文の場合にも見られる。次に一例を挙げる。み、閉じ括弧で受けている。これに類似する閉じ括弧の用法は、じ括弧なしの「「を用い、そして一連の会話が終了するときにの

※以下に抄録せんとする予が日記を一瞥せよ。○芥川龍之介『開化の殺人』(大正七年刊)

「十一月×日、子爵は遂に(略) 「十月×日、明子、子なきの故を以て(略)

はコゴ。 「二月×日、嗚呼予は今にして始めて知る、(略)されど明子

- 古川緑波の記事では、引用部分が==で示されている。(4) 例えば、昭和二十年代の『文學界』(文藝春秋)に連載された
- 、Windows では、「Mindows American Control of the Cont

て、さぞかし徒然におはしつらん。))と云へば、((昨日よりの大雪に、外邊に出る事もならず、洞にのみ籠り給ひ

とある部分を、

ました。』と、云ひますと、『イヤ大王様!』ひどい大雪で御座りますな。一寸御見舞に参り

たと考えられる。 しては一般的でなくなった現状に鑑みて、『 』を意識的に用いしては一般的でなくなった現状に鑑みて、『 』を意識的に用いているという点である。小波は、(())が既に会話特立符号を文一致体に改められているのみならず、会話特立符号種も相違しの如く書き換えている。注目すべきなのは、文体が文語体から言の如く書き換えている。注目すべきなのは、文体が文語体から言

【参考文献】

成立』明治書院宇野義方(一九六四)「文字・表記の変遷」『講座現代語2 現代語の

の史的対照』明治書院宇野義方(一九八二)「句読法の歴史」『講座日本語学6 現代表記と

江湖山恒明(一九六四)「欧文脈」『講座現代語2 現代語の成立』明の東京』明治書影

大熊智子(一九九五)「引用符を用いた会話文表記の成立」『東京女日

本文學』第八十四號

岩波書店(一九九三)「文体の中の記号」『季刊 文学』一九九三冬

小学館辞典編集部『句読点、記号・活用辞典。』小学館、二〇〇七

【参照テキスト】

〈文学作品〉

行年を併せて示す。 ①の作品群については、「精選 名著複刻全集 近代文学館」、「秀選 名著複刻全集 近代文学館」、「名著複刻 日本児童文学館」、「特選 名著複刻全集 近代文学館」、「秀選 名著複刻全集 近代文学館」、「秀選 名著複刻全集 近代文学館」、「新選 の作品群については、「精選 名著複刻全集 近代文学館」、「新選

照した。 ライブラリー」(http://kindai.ndl.go.jp/index.html)の画像を参②の作品群については、特にことわりのない限り、「近代デジタル

叉』(明治三十一―三十六年)、假名垣魯文『幹談安愚樂鍋』(明治四年)、尾崎紅葉『吐尼色懺悔』(明治二十二年)、尾崎紅葉『金色夜音』こがね丸』(大正十年)、大江小波『富世少年氣質』(明治二十五0芥川龍之介「開化の殺人」『傀儡師』(大正八年)、巖谷小波『旨

十五年)、山田美妙『夏木立』(明治二十一年) 二葉亭四迷『鰯浮雲』(明治二十年)、森鷗外『即興詩人』(明治三 梅』(明治十九年)、坪内逍遙『三歎當世書生氣質』(明治十八年)、 川島忠之助譯『巤八十日間世界一周』(明治十三年)、三遊亭 若林玵藏『熊牡丹燈篭』(明治十七年)、末廣鐵腸『聡治雪中

②石橋思案『京がのこ』(明治二十三年)『電氣の死刑』(明治二十六 治三十年)『突貫』(明治三十四年)『新俳優』(明治三十四年)『大 ぬ坊』(明治二十九年)『田毎源氏』(明治三十年)『海の秘密』(明 他四十三篇』(明治二十八年)『朝嵐』(明治二十八年)『大軍艦』 年)『笑の國』(明治三十九年)、江見水蔭『花守』(明治二十四年) 二十八年)『春色二本柳』(明治二十九年)『新知事』(明治三十一 年)『破手紙』(明治二十六年)『花盗人』(明治二十八年)『筆と紙』 春怨』(明治三十六年)『觀音岩』(明治三十九年)、山田美妙『嘲戒 九年)『網代木』(明治二十九年)『神出鬼没』(明治三十五年)『青 十六年)、川上眉山『黒髪』(明治二十六年)『大村少尉』(明治二十 十一年)、尾崎紅葉『片人色懺悔』(明治二十二年)『風流京人形』 幻燈』(明治三十五年)『武装之卷』(明治三十七年)『漁師の娘』 九年)『遠山霞』(明治二十九年)『命不知』(明治二十九年)『鎌わ 『四本指』(明治二十六年)『水車他六編』(明治二十八年)『速射砲 氣質』(明治二十五年)『蝸牛』(明治二十六年)『麥わら笛』(明治 "紫』(明治二十七年) 『やまと昭君』(明治二十八年) 『冷熱』(明治 二十三年)『裸美人』(明治二十五年)、『隣の女』(明治二十七年) (明治三十八年)『新空氣』(明治三十九年)『廢船萬里號』(明治四 (明治二十九年) 『海底の錨』(明治二十九年) 『水の聲』(明治二十 (明治二十四年)『友禅染(ぬれ浴衣)』(明治二十五年)『當世少年 (明治三十三年)、巖谷小波『初紅葉』(明治二十二年)『こがね丸』 一十九年) 『青葡萄』(明治二十九年) 『金色夜叉』(明治三十一―三 (明治二十二年) 『初時雨』(明治二十二年) 『南無阿彌陀佛』(明治

> 術』(明治四十二年)『滑稽妙な水』(明治四十三年) 秘事』(明治二十四年)『漁隊の遠征』(明治三十六年)『滑稽妙な 年)『白玉蘭』(明治二十四年)『葛の裏葉』(明治二十四年)『盗賊 九年)『ぬれごろも初篇』(明治二十一年)『園の二葉』(明治二十四 小説天狗』(明治十九年、亀井一九九三による)『少年姿』(明治十

・石橋思案「言文一致に附いて」(明治二十二年三月三十一日付『讀 七八) 賣新聞』、 山本正秀『近代文体形成史料集成 発生篇』桜楓社、一九

・伊藤圭介「日本人ノ雅俗文章ニ於ケル。句讀段落ヲ標示スルヲ以テ 桜楓社、一九七八 會院雜誌』二ノ一〇、山本正秀『近代文体形成史料集成 発生篇』 必要トセサルハ。一缺事タルヲ辨ス。」(明治十四年二月『東京學士

・尾崎紅葉「文盲手引草」(明治二十二年『文庫』二六・二七號、 本正秀『近代文体形成史料集成 発生篇』桜楓社、一九七八) 山

・浩然堂主人「甕外生の『明治文章の月旦』を讀む」(明治二十三年 二月三日『日本之文華』、山本正秀『近代文体形成史料集成 篇』桜楓社、 一九七八)

・太宰春臺『和讀要領』『漢語文典叢書 第三巻』汲古書院

芳賀矢一 杉谷代水編『作文講話及び文範』講談社学術文庫、 一九

山岸荷葉「故紅葉大人談片」『紅葉全集 第十巻』岩波書店、 一九九

國語研究會『國定新讀本 (一近代デジタルライブラリー」を参照 句讀法及分別書方』 矢島誠進堂、 九一

	石橋思案	巖谷小波	江見水蔭	尾崎紅葉	山田美妙	川上眉山
明治 19 年以前			÷		== 2	
明治 20 ~ 24 年	==1	Γ1 (()) 1	[]1	() 1	Г Ј 5	
明治 25 ~ 29 年	「1 「 」1 ==1	(()) 3 [] 2	(()) 1	(()) 2 [] 4		『 1
明治 30 年以降		[]2	[] 5	[]1	『 』 2 「 1	Г Ј 3

(かわなべ・ゆいな 本学大学院博士前期課程)(いわき・さわ 本学大学院博士後期課程)(はとの・けいすけ 本学大学院博士後期課程)